

## [研究ノート]

## 幕末の蘭学修業時代(2)

——日蘭通商の背後を支えたもの——

斎藤 祥 男

## 〈目 次〉 はじめに

## 1 蘭学塾入門手続（東修の礼）

## 2 蘭医書の翻訳・著述物

## (1) 蘭医の著述パターン

## (2) 坪井信道父子の著書・翻訳業績

## (i) 坪井信道の訳書・著述

## (ii) 坪井信良の訳書・著述

## (iii) 坪井為春の訳書・著述

## (3) 翻訳方法

## (4) 翻訳権

## (5) 洋(蘭)学書籍の輸入・流通事情

(以上、本誌第6巻第1号に収録)

## 3 蘭館医とオランダ通詞

## (1) 蘭館医の制度

## (2) オランダ通詞の制度

## (3) 蘭館医の貢献——幕末の鎖国下にあって

## (4) オランダ通詞の貢献

(以上、本号に収録)

### 3 蘭館医とオランダ通詞

#### (1) 蘭館医の制度

オランダ東インド会社はアジア各地の商館に医務職員を配置していた。彼らは本国では内科を扱うのを禁じられていた者が多い。というのは、その多くは理髪師外科医（バルビール＝barbier・バベルト＝babert）と呼ばれ、整髪やひげそりのほかに、静脈を刺して放血する刺<sup>とく</sup>絡（注＝悪い血を放血して病気を治す）や、外傷、皮膚病の手当、そして簡単な外科手術などの処置をする者であって、特殊免許の所持者ではあるが、オランダ本国での正式な医者とはいいがたい特別医であった。もちろん、医務職員のなかには正式の医者もいた。彼らはシリユルハイン(chirurgijn)と呼ばれ、上級医務職員であって、通常外科医であるが、東インド会社の独自の職務としては、外科と内科を兼ねたようである。このシリユルハインにも<sup>オツベル</sup>上級と<sup>オンデル</sup>下級の階級があった。

18世紀末には、会社は約300人もの医師を必要としていた。その3分の1は本国と植民地を往復する船に乗船する船医であり、また別の三分の一は東南アジア各地の商館の間を往復する船に配置され、残りの3分の1は各地の商館に駐在して、商館職員の治療や衛生監理に従事したが、これだけの数の医務職員を集めることはなかなか大変なことであった。したがって、正式な医者を雇いたくとも応募者が少ないため、会社独自の試験によってバルビール（バベルト）を集めて対応したのである。このバベルトは前記のシリユルハインの下の階級で、バベルトにも上・下の階級（opperbarbier；onderbarbier）があり、経験と社内試験によって上級に進む仕組みであった。シリユルハインの数は全医師中の3％程度であったという（赤木昭夫『蘭学の時代』）。

長崎の商館に配置された医務職員数は、「200年の長い年月のうちでは増減があったが、（概して言えば）上医または上外科医が1または2名、下医または下外科医が1または2名」であったという（科野孝蔵『オランダ東インド会社の歴史』同文館182ページ）。これは交替時期に重複して計算される場合がある。離任者が

長崎を出帆した後の(大陽暦の)10月から、新任者が来航・到着する翌年7、8月までは職員数は少なくなるが、7、8月から10月までは新任者と離任者が同居するので、職員数は一時的に増加する。また、補充がつかない場合も当然発生する。

長崎商館の場合も例外ではなく、「幕末に幕府の求めで来日したポンペ・ファン・メルデルフォールト (Johannes Lidius Cathalius Pompe Van Meerdervoort) などを除くと、正式の医師は、延宝2年(1674)から2年間滞日したウィレム・テン・ライネ(またはレイム)、元禄3年(1690)から2年間滞日したエンゲル・ペスト・ケンペル、安永4年(1775)から1年間滞日したカール・ペータ・ツェンベリー、文政6年(1823)から6年間滞日したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Philip Franz Von Siebold) ぐらいであった」という(赤井昭夫前掲書)。因みに、正保3年(1646)10日に、商館長ウィレム・フェルステーンの江戸参府に同行したマタイス・クラウセンは、オッペルバルビール(上級理髪師外科医)であったし、天和2年(1682)から貞享2年(1685)に、再度長崎商館長となったアンドレアス・クライエルは、バルビール(理髪師外科医)からオッペルシュハイン(上級医師)に昇進した人であった。これらの医師たちの出身国も、オランダ、ドイツ、スウェーデンなど、各国に及んでいる(山脇悌二郎・前掲書)。伴忠康『適塾をめぐる人々』(創元社)によると、1850年頃までに来日した蘭館医は、約150名といわれる(同著40ページ)。参考までに、別の資料から、当時の職員の状態を示す資料を掲げておこう(これらはすべて、科野孝蔵『オランダ東インド会社の歴史』から借用したものである)。

## (2) オランダ通詞の制度

通詞はオランダ語でトルクまたはタールマンと言った。彼らは、最初(平戸商館時代)はオランダ商館の使用人であったが、これでは幕府の側に有利な通訳はできかねる。雇い主であるオランダ商館の利益が優先するからである。そこで幕府は商館を長崎に移転させる時に、その手直しとして、平戸商館時代の通詞は2人だけを認め、通詞は將軍から俸給を受け取ることに定める一方、オランダ商館からの俸給支払いを禁じ、長崎奉行配下の通詞団を発足させた。

第1表 オランダ東インド会社  
の在東インド職員  
数 (1687—88年)

区 別	人 数
商館での従業者	12,000
東インド海上の者	4,000
本国からの船上の者	4,000
本国への船上の者	1,900
合 計	21,900

(資料) F.S. Gastra, *De Geschiedenis van de VOC*, 1982, p. 81より科野氏作成。

第2表 オランダ東インド会社  
の在東インド従業  
員の地理的分布  
(1753年)

地 域	人 数
バ タ ビ ア	4,860
セ イ ロ ン	4,652
ジャ ワ 東 岸	2,822
マ ラ バ ル	1,395
マ カ ッ サ ル	995
ア ン ボ イ ナ	864
コ ロ マ ン デ ル	789
テ ン ナ テ	759
バ ン ダ	646
ス マ ト ラ 西 岸	478
マ ラ ッ カ	471
ベ ン ガ ル	440
バ ン タ ム	407
ス ラ ト	385
チェリボン	148
パレンバン	83
バンジェルマシン	68
チ モ ー ル	68
ポウロ・ゴンディ	22
ガ ム ロ ン	22
長 崎	11

(資料) F.S. Gastra, *De Geschiedenis van de VOC*, 1982, p. 82

第3表 出島商館の館員の  
構成

役 職	人 数
商館長 (カピタン)	1
次席館員 (ヘトル)	1
蔵荷役 (倉庫係)	1
筆者頭 (書記官)	1 または 2
上医または上外科医	1 または 2
下医または下外科医	1 または 2
簿 記 役	1 または 2
筆者 (一般職員)	6 または 7

(典拠) 科野孝蔵『オランダ東インド会社の歴史』

第4表 オランダ東インド会社  
の東インド商館に  
おけるヨーロッパ人  
従業者の職種 (1687  
—88年)

(単位:人)

軍 人	7,806
兵 士	5,860
伍 長	682
曹 長	682
軍 曹	382
高級軍人	200
行政および貿易関係者	877
簿記係と助手	557
下級商務員	190
上級商務員	115
そ の 他	15
海 員	1,413
そ の 他	1,455
外 科 医	200
牧 師	34
病氣見舞人	40
学校講師	23
寺 男	11
そ の 他	1,147
総 計	11,551

(資料) F.S. Gastra, *De Geschiedenis van de VOC*, 1982, pp. 80-81より科野氏作成。

通詞は通訳・翻訳の仕事をするのであるが、階級・職階があつて、役人通詞は家柄により限定されていたが、最初は「稽古通詞」から出発して、小通詞、大通詞と昇進するのに対して、家柄の低い人は、「平内通詞」といい、役人ではない。内通詞の家に生まれた人は、稽古通詞にさえなれず、それより低い地位の内通詞小頭、内通詞小頭見習が上級職(役人相当)の限界であつて、多くは平内通詞であつた。通詞の数は、幕末期には130~140人程度はいたようである。(福地源一郎『長崎3百年』では140人の通詞がいたとし、呉秀三訳『シーボルト日本交通貿易史』では(役人通詞)50人の通詞団があつたとしているから、平通詞を加えれば130人ぐらいになるという)。因みに、内通詞は協荷取引専従の通詞であつたから、公的取引の積荷の送り状などを翻訳するのは、大通詞・小通詞の役目であつたし、商館長の江戸参府には大通詞が同行した。

宝永5年には、長崎商館の通詞は別表(揭示)のように決められていた模様であるが(『宝永五子年役料高并諸役人勤方発端年号等』)、これには内通詞小頭や平通詞は含まれていない。

長崎商館通詞員数表

三、蘭陀通詞目付	二人
阿蘭陀大通辞	四人
右大通詞之内耆人江戸登雑用	
阿蘭陀小通詞	四人
右小通詞之内耆人江戸登雑用	
阿蘭陀稽古通詞	拾耆人
阿蘭陀内通詞小頭	拾貳人

### (3) 蘭館医の貢献——幕末の鎖国下にあつて

近代西欧医学を導入し、発展させて行くことに対応できたうえで、明治維新後の100年間で世界の医学界でも先進国の一つに数えられるまでになった日本の背景には、いくつかの潜在的な基礎条件があつた。

その第一は、日本が古くから異文化への対応能力があつたからであろう。周

知のように、中国本土の文化や学術は、古くから遣随使や随唐使を通じて導入したし、古朝鮮からの移住者の文化や学芸は、日本人の好奇心や知識欲によって吸収されてきた。漢文学の伝来によって口伝え<sup>くちづた</sup>であった日本語を漢字で記述する技術を開発し、萬葉仮名によって古来の和歌や伝説を記録に残すことができた。中世以降、中国の文献・書籍を読解するのに、返り記号や1・2の順位記号を側記して、日本語文法に読みかえる技術も工夫した。これらを模倣して、和漢文という独自の中国文作成を通じて、維新时期までの日本的中国文型が記述手段として一般化することになった。いやむしろ、明治期を通じても中国文体・文法と日本語の仮名<sup>かな</sup>が混用されて、その流れは今日の日本語にいぜんとして継承されている。

西欧言語の一つであるオランダ語を理解するための文法は、既にみたように中国語の和文訳の法則を準用することから始められ、冠詞や時相 (tense) の一致法則のように、日本語と異なる部分を究明しつつ、それらを補って邦訳化を計<sup>はか</sup>ってきた、このような歴史的経験と、それを咀嚼<sup>そしやく</sup>しようとする努力が日本人に潜在したことが挙げられると思う。

第二に、自然科学の分野の立ち遅れを明確に受けとめる能力を持っていたことであり、それへの積極的関心と解明への興味を強く感じたことであろう。無関心は異文化の導入にあたってマイナスに作用する。関心は興味を呼び、興味は取得への欲望につながる。これが学術や学理を伴う場合には、その理解から究明に進んで行く。

精神科学や宗教などにあっては、心理作用や信仰への帰依によって、自然科学の学理究明の方式とは異なったプロセスもありうる。多くの場合、学理よりも精神的・心理的納得によって対象を把握することが可能であるが、自然科学の場合は、物理的・可視的な物証を伴った理論の合理性が必要となる。西欧医学である蘭医学は、漢医方よりもすぐれて物理的・可視的であったし、理論と物証とが漢医方医学よりもいっそう相伴的であった。幕政時代の中期以降の日本人は、鎖国であった日本にもっとも欠落していたものは、自然科学の分野であったことを認識し、国内統一が一段落して精神文化や芸能が華<sup>はな</sup>さく世情を迎えたとき、異国船の日本近海への出沒を目にして、率直に自然科学の遅れを認

識したのであった。日本人は無知を知る能力があったのである。

第三に、偶然ながら、先に到来していたポルトガルを排して、西欧文明の導入をオランダ1国に絞り、長崎での内国貿易を開始したことである。内国貿易とは、自国内の外国商館との間での貿易取引であって、御朱印船貿易は外国へ出向いての取引であるから、外国貿易となる。しかもこの貿易は、ケース・バイ・ケースのスポット (spot) 取引として、契約が成立したときにのみ外国船が到着する輸出入ではなく、常時居留地である長崎出島に倉庫を置き、在庫を抱えての取引であって、出島の倉庫は保税倉庫であった。商館は日本で買付けたものを出島の倉庫に入れて、船の到着を待ったし、日本へ持ち込んだ貨物が売れないときには、自己の勘定で売れるまで保持した。もちろん、注文取引による納入物品もあった。オランダ商館はこれらの取引を管理・運営するため、派遣した商館員を駐在させていたので、彼らの健康管理や診養上、既述のとおり商館医を置いた。医師常駐の商館経由の貿易取引は、オランダ東インド会社であったからこそ可能であった。この結果が、西欧医学を日本に導入する切掛けとなったのである。

そのほか、当時の国際情勢とか、日本人の勤勉性(換言すれば勉強好き)とか、幕府自体の国防研究の必要性などがあるが、これらはむしろ後発的な理由であって、ここでは詳述する必要はなкаろうと思う。

むしろ、もっとも注意を向けるべきは、蘭館医のなかに優秀な人材がおり、後には幕府は優秀な蘭館医を派遣することを要求した点であり、これには日本の蘭学・蘭医師の知識が向上して、質的要求に応じることがオランダ商館の存続上必要となった面があった点であろう。

平戸を嚆矢として長崎移転後の商館に配属された蘭館医は、必ずしも優秀な医師ではなかった。それは貿易量が少なければ蘭館職員の人数も少なく、未知の日本へ配属する早期の駐在医は、既述の下級医師(理髪師外科医)であったのは当然であろう。貿易量の増加が職員数を増加させ、重要拠点となるにしたがって上級医師と下級医師のセットでの派遣になったのである。

幕末の文政6年(1823)7月、1人の優れた商館医がやってきた。フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトである。1796年(西)ドイツ・バイエルン州のヴ

ュルツブルクの医師の家に生まれた彼は、ヴェルツブルク大学で医学を学び、地学、天文、動植物の諸学に関心を広めていたが、アジアでの研究を希望して、オランダ政府の軍医として、ジャワのバタビアを経て長崎商館に派遣された。一説には、総督が彼に日本研究をさせることは、自国の商業政策にも有益であると判断したからであるという（外山幹夫『長崎奉行』中公新書176ページ）。

出島に着任したシーボルトは、オランダ通詞のうち蘭医学に興味をもつ者に対して、乞われるままにこれを教えた。吉雄・檜林の両名（通詞・のちに外科医）のところへは、週に1回、交互に往診と講義に出かけていたという（赤木昭夫前掲書）。そして、その人々を介して日本人の病人を診察治療していたが、正式な許可は得ていなかった。

シーボルトは日本研究の目的から、できる限り多くの日本人と接触をはかる必要があった。彼と入れ代わりに離日した前商館長のブロムホフは、シーボルトが日本人医学生に出島で教育を施せるよう長崎奉行に申し入れていたが、翌文政7年に着任した新館長ステュルレルは、病人の治療と薬用植物の採取を理由として、シーボルトが長崎の町へ出られるように、奉行の許可を求めた。時の長崎奉行土方出雲守<sup>ひじかた いずものかみ</sup>、高橋越前守<sup>たかはしえいぜんのかみ</sup>以下の奉行所役人は、蘭医学修業の者の出島<sup>でい</sup>出入りを許し、シーボルトの市中への外出の禁を緩めた<sup>ゆる</sup>。やがて、シーボルトは奉行所の許可のもとに、天領の長崎村中川郷鳴滝に塾を開き、塾生を集めて蘭医学の講義と治療を行なうことになる。これが世に言う鳴滝塾であって、多くの俊秀を輩出したことは周知のとおりである。

さて、シーボルトの功績があまりにも大きいため、他の蘭館医については比較的に影が薄い<sup>（注）</sup>が、次に主なる駐日蘭館医で知られている人々を、伴忠康『適塾をめぐる人々』から引用して付記しておこう。

#### ○ダニエル・ブス (Daniel Busch)

元和8年(1622)に平戸へ来航。寛文4年(1664)と5年(1665)に出島に再三来航。平戸の松浦藩医である半田甫安(改名して嵐山甫安)に外科医師免許を与えた。甫安はもとは通詞という。『蕃国治方類聚の伝』を著している。

#### ○カスパル・スハムベルヘン (Kaspar Schmbergen)

慶安2年(1649)から2年間滞在して、外科術を伝えた。カスパル流外科とい



われている。

○テン・レイネ (=ライネ Willem ten Rhyne)

延宝2年(1674)から4年(1676)まで滞在して、鍼灸を研究するかたわら、日本の医師に医療技術を教えた。

○ウィレム・ホフマン (Willem Hoffman)

元禄元年(1688)に来日。外科医であったようだ。アンブロアズ・パレの『外科解剖入門書』をもたらした人である。

○エンゲルベルト・ケンペル (=エンゲルベルト Engelbert Kämpfer)〔ドイツ人〕

元禄3年(1690)から5年(1692)までの2年間滞在。医学の伝授を行なう一方、日本風物誌を研究し、帰国後、『外国奇聞』(Amoenitates Exoticas 1712)や『日本誌』(Geschichte und Beschreibung von Japan 1747)を発刊した。

○ツンベルグ (=ツュンベリ Carl Peter Thunberg)〔スウェーデン人〕

安永4年(1775)に来日して、1年間滞在した。医学、薬学、植物学、動物学を伝授した。彼は植物分類学者で有名なリンネ(Carl von Linné)の門下生であったから、薬学や動植物学については特に詳しかったようである。帰国後はウプサス大学の医学、植物学担当教授となった人である。

○ボンペ (Johannes Lidius Pompe van Meerdersoord)

彼は蘭館医ではなく、幕府が最初に招聘して雇用した外人教師であり、海軍伝習所の医官として来日した。彼は、幕府の医師・松本良順、佐藤尚中(山口舜海)、司馬凌海など諸藩から派遣の医学生に教授をした。門下からは多数の俊秀が輩出している。たとえば、緒方惟準(洪庵の次男で信道門下)、長与専斎、荒瀬幾造、石井久吉、高橋正純(後の大阪府病院長・教授局責任者)、林洞斎、半井元端、橋本節斎、橋本琢磨(網常、左内の弟)、吉雄圭斎、入沢恭平、土肥晋裕などである。

#### (4) オランダ通詞の貢献

すでに述べたように、蘭医書が次第に多くなり、専門的内容のものが到来するようになると、通関時にその内容の説明が必要となる。

同時に、医学・治療に必要な薬剤や原料、診療器が輸入されれば、それらの名称、用途、分類が必要となる。さらには、蘭館医が講義や診療を行なえば、患者への診問や、医師たる蘭館医への答弁上、通訳は欠かせない。これらは当然、医学、薬学等の知識なしではなし得ることではない。

オランダ東インド会社の積荷目録のなかに、辞書や百科辞典などを始め、医学の入門書などで、「通詞のために」とか、「通詞団用として」贈呈の書籍が多数含まれていたことは当然であった。蘭館は通詞のための医学講義を行なわざるを得なかったのである。

通詞のなかには西洋医学に興味をもつ者も出てきたし、また、それだけに専門的に突っ込んで勉強する者も現れてきた。診療・治療の立会いでは、実践面での研修を伴うことになる。通詞のなかに蘭医学者や医師が登場しても不思議はない。通詞から転じて医師になり、大成して幕府の奥医師になったり、一家をなした人々も多い。以下に、何人かの人について付記しておこう。

○吉雄永章（幸左衛門、後に幸作。1724—1800）

彼は通詞としては名門であった吉雄家の出であるが、晩年、通詞を辞して耕毛と号した外科医である。その流れを吉雄流外科といい、彼はその開祖であって、前野良沢や杉田玄白の師であり、『解体新書』の序文は彼が書いた。

○吉雄権之助（耕牛の子息、1785—1831）

彼も通詞の出であるが、『長崎ハルマ』作成にあたっての協力者であり、門下生には新官涼庭（1787—1854）がいる。涼庭は京都に帰って順正書院（蘭学塾）を開き、一家をなした人である。

○榎林鎮山（時敏、通称新五兵衛、1643—1711）

彼は貞享2年（1685）に大通詞になった。蘭館医ウィリアム・ホフマンから与えられたアンブロアズ・パレの『外科解剖入門書』の蘭訳本を邦訳して、『外科宗伝』2冊を著して、榎林外科の基礎となった。元禄5年には通詞を辞して栄久と改名し、外科を本業とする医師となった。

○半田甫安（嵐山甫安）

彼も通詞の出身であるが、平戸松浦藩医となったことは既述した。

○桂川甫筑（森島邦教）

通詞であった彼は半田(嵐山) 甫安の門に入り、後に江戸に出て甲府侯徳川家宣に召され(元禄9年=1699)、奥医師となり法眼に叙せられた。桂川流外科の始祖である。因みに、桂川家4代の甫周は『解体新書』の訳者であり、『和蘭字彙』を著した。

○西玄甫(吉兵衛)

彼は、慶長16年(1611)に来日したフェレイラ(Christovão Ferreira)がキリシタンを放教し(寛永12年=1635)、沢野忠庵と日本名に改名したが、そのフェレイラこと忠庵から南蛮外科を学んだ人であるが、承応2年(1653)に大通詞に昇進したが、寛文9年(1669)には辞退して江戸にでて、幕府の奥医師となって法眼に叙せられた。この人が西流外科の開祖である。(注：伴忠康『適塾をめぐる人々』創元社刊では、来日を慶長16年としているが、岩波『西洋人名辞典』では来日を慶長15年(1610)としている)

○西善三郎

彼は、享保7年(1722)に長崎に出仕し、宝暦4年(1754)に大通辞になったが、日本の蘭和辞典を最初に手がけた人といわれている。西家は平戸系通詞の家柄である。

○馬場佐十郎(貞田, 1787—1822)

馬場家は平戸系八氏、長崎系七氏の通詞家系(『阿蘭陀通詞由緒書』)以外の家系に属しているが、代々通詞の家柄であった。文化4年12月、幕府は林大学頭を経て世界地図制作を天文方<sup>てんもんがた</sup>に命じたが、その参考に供する蘭書を読みこなすため、翌文化5年3月、長崎から通詞の馬場佐十郎が呼びよせられた。馬場は、文化8年の3月には幕命によってショメールの百科辞典の翻訳にとりかっている。この後見役となったのが大槻玄沢であった。この書の翻訳は幕府の事業として代々受け継がれて、35年の長きにわたって続けられたのである〔同書の写真、オランダ語原本の写真、および概要は、拙稿『徳川鎖国期(幕末)の技術導入』pp.58～59を参照〕。(つづく)